

## 16・17世紀の尾張国知多郡の富士信仰 ー富士山登拝と浅間社の勧請ー

日本福祉大学知多半島総合研究所 研究員 山形 隆 司

### はじめに

「三禅定」についての研究が活況を呈している。三禅定は、富士山・立山・白山の三霊山を一度に巡るもので、近世には尾張・三河・美濃から出立した事例が多い<sup>(1)</sup>。

小林一葵氏により始められた三禅定の研究は、高瀬重雄氏により立山の檀那場形成とのかかわりが指摘され、知多半島における津田豊彦氏による関係史料の精力的な発掘と分析、村中治彦氏による白山信仰と三禅定との関係の考察を経て、近年では2010年に富山県立山博物館で開催された特別企画展「立山・富士山・白山 みつの山めぐりー霊山巡礼の旅『三禅定』ー」を契機として、福江充氏・加藤基樹氏により活発な議論がなされている。福江充氏は、近世に著された道中記などにより三禅定の行程などの具体的な様相を明らかにするとともに、三禅定の成立と立山の布教活動との関連について言及している。また加藤基樹氏はこれまでの三禅定についての研究史を要領よく整理した上で、三禅定が中世に遡ることを指摘するとともに、三禅定についての思想面からのアプローチを試みている<sup>(2)</sup>。

これら三禅定の研究において、その論拠となっている史料には知多半島に関係するものが多く含まれている。菊池邦彦氏は、これらの史料のいくつかを富士信仰への関心から取り上げている<sup>(3)</sup>。筆者は前稿において、知多郡小鈴谷村の「富士講」を事例として取り上げ、この講では三禅定に赴い

ているが、とりわけ富士山への志向性が強いこと、また富士信仰が個人的な信仰に基づくものというよりは、地域としての信仰の形をとっており、村で参詣に伴う儀礼が細かく定められていたことを指摘した<sup>(4)</sup>。

これに加えて、本稿では16・17世紀に遡って知多郡からの富士山登拝の史料を確認するとともに、富士信仰に基づいて地域に勧請された浅間社・富士社などの社祠について若干の検討を行いたい。

### 1. 16・17世紀における知多郡からの富士山登拝

遅くとも16世紀中頃には知多郡から富士山へ登拝する者があったことは、登山口の宿坊に残された道者帳（休泊者名簿）から確認できる。ここでは、17世紀前半までの登拝者が記録されている道者帳を確認しておきたい。

菊池邦彦氏は、登山口の一つ村山口（静岡県富士宮市）にあった興法寺大鏡坊で記録された「富士山檀記」という冊子を用いて中世後期から近世前期の富士山登拝者について分析している。この帳面は、「駿河国檀所帳古帳二冊」「附甲州分巻冊」「遠江国檀所帳古帳一冊」「三河国檀所帳古帳二冊」「武蔵国江戸檀所帳古帳一冊」の合計7冊が綴られているが、このうち三河国檀所帳の1冊「三州檀所帳」に知多郡からの登拝者の記載が混じっていることが指摘されている<sup>(5)</sup>。その該当箇所を抜粋すると、以下の

とおりである<sup>(6)</sup>。

### 【史料1】

「自天文元年 至慶安四年

三州檀所帳

大鏡坊 執事 」（表紙）

（天文二十一年）

六月二日

壹貫貳百文 村木先達又次郎

（三日）

一、寺本 同行十三人

壹貫文

百文 先達万大夫

（天正十九年五月二十五日）

一、寺本 円覚坊

百文・扇子壹本

（慶長九年五月二十五日）

知多之郡 百文 慶順

一、うつみ（内海）孫右衛門

六匁目 同行四人

廿三匁目九分 大野大力坊

同行十三人 百文

（元和九年六月一日）

一、ふつと（布土）

壹分二百五十文 六人分

また大宮口の起点の富士山本宮浅間神社の宿坊で作成された道者帳にも知多郡の地名が見える<sup>(7)</sup>。

同神社の宿坊の一つ御炊坊については、表紙に「永正九年之古帳写 八木御炊官」と記された帳面<sup>(8)</sup>が残る。ただし、この帳面の本文中には「永禄六年」との記載があり、表紙の紀年も追記されたものと見られる。また「大宮導者坊記聞」という記録に、御炊坊で編集された道者帳の一つとして「永禄年中之帳」が見える<sup>(9)</sup>。よって、こ

こでは永禄年間（1558-70）の作成と推定しておく。この帳面の中には「おはりのくに之分」として、尾張国からの登拝者25件分の記載がある。このうち知多郡の地名に比定できるものを抜粋すると以下のとおりである。

### 【史料2】

一、ちたのかうり（知多郡）

一、をゝの（大野）

一、きつし（枳豆志）

一、やまた（山田）

一、大たに（大谷）

さらに同宿坊の「自慶長十七年壬子年至慶安元戊子年 参州尾州濃州信州諸国 大宮御炊導者」と表紙に記載のある帳面<sup>(10)</sup>には以下の記載がある。

### 【史料3】

寛永十九壬午

六月廿一日

一人 尾州ちた（知多）郡

大谷 次右衛門殿

同所 喜作殿

たるミ（樽水）孫作殿

同所 甚蔵

（正保二年）

六月五日 尾州大野大力

四人春長あつかり

（正保四年）

六月十九日

尾張ちた（知多）ノ郡

はね（羽根）村大野ノ内

四人

半右衛門殿

同所 権九郎殿

同所 武兵へ殿

## 同所 茂吉殿

この他、同神社の別の宿坊・行事大夫坊で作成されたとみられる道者帳<sup>(11)</sup>は、表紙に「慶長拾七年壬子 子ノ六月二日 導者付帳 鈴木甚左衛門」と記されており、知多郡からの休泊者として以下の記載が見える。

## 【史料4】

(元和六年六月)

十一日

拾四人 おはりちた(尾張知多)同

此坊入こかミ四十しめ

をはり 長左衛門

(元和七年六月七日)

同日

七人 おはり之内大たに(谷)

此坊入三百文 九右衛門殿

これら16世紀中頃から17世紀前半までの知多郡からの登拝者を時系列でまとめ

たものが表1である。

表1によると宿坊への滞在日時は、5月25日～6月21日であり、富士山・白山・立山への登拝が可能な期間がいずれも概ね6月と7月の2か月間に限られることを勘案すると登拝者は富士山のみを登拝したか、三禪定を行ったにしても富士山→立山→白山の順で登拝したものと考えられる。

地域的には、寺本・大野・大谷といった知多半島西側の伊勢湾に面した村の名前が複数回現れている。また1591年(天正19年)の円覚坊や1604年(慶長9年)の慶順のように1人で登拝する修行者のほか、早くも1552年(天文21年)には、又次郎・万大夫といった先達のもと集団で登拝した例も見られる<sup>(12)</sup>。

1604年(慶長9年)と1645年(正保2年)には、大野・大力坊が同行を伴い登拝しており、地域において富士山先達として固定的な位置を占めていたことがうかがえる。知多郡からの登拝者はこの時期にすでに先達を伴った組織的な登拝を行っていた

表1 知多郡からの富士山登拝者

年号	月日	地域	人名	奉納金	人数等	宿坊
天文21年(1552)	6月2日	村木	先達・又次郎	1貫200文		興法寺大鏡坊
	6月3日	寺本	先達・万大夫	1貫文・100文	同行13人	
永禄年間(1552-70)		大野・榎豆志・山田・大谷				本宮浅間神社御炊坊
天正19年(1591)	5月25日	寺本	円覚坊	100文・扇子1本	1人	興法寺大鏡坊
慶長9年(1604)	5月25日	知多郡	慶順	100文	1人	
		内海	孫右衛門	6匁	同行4人	
		大野	大力坊	23匁9分・100文	同行13人	本宮浅間神社行事大夫坊
元和6年(1620)	6月11日	知多	長左衛門	こかみ40匁	14人	
元和7年(1621)	6月7日	大谷	九右衛門	300文	7人	
元和9年(1623)	6月1日	布土		1分250文	6人	興法寺大鏡坊
寛永19年(1642)	6月21日	大谷	次右衛門ほか1名		2人	本宮浅間神社御炊坊
		樽水	孫作ほか1名		2人	
正保2年(1645)	6月5日	大野	大力		4人春長あつまり	
正保4年(1647)	6月19日	羽根	半右衛門ほか3名		4人	

たと言える。また、この大力坊の同行については「四人春長あつまり（預り）」と記載されている。「春長」は本宮浅間神社の宿坊・春長坊のことで、堀内真氏によれば「春長坊は、関東道者と坊なしの坊（近江道者）、伊賀国など遠隔地の道者を檀那にもつ」とされている<sup>(13)</sup>。大力坊の同行が、伊勢など尾張以外にも広がりを見せていた可能性もある。

青柳周一氏は、富士山須走口に残る御師家の宿帳を分析する中で、伊勢国からの登拝者の特徴として、先達・講元等を伴った高度な集団化を指摘している<sup>(14)</sup>が、この特徴は伊勢国と伊勢湾を介して隣接する尾張国知多郡でも同様の傾向があったといえる。

このことは、富士山登山道中の石室（山小屋）の造営のあり方にも如実に表れている。興法寺大鏡坊で 1854 年（嘉永 7 年）に作成された「富士山室小屋建立古帳面写」<sup>(15)</sup>には石室の来歴が記されている。このうち「尾張室」については、その施主について次のように記載されている。

#### 【史料 5】

八合 大鏡坊 寛文十一年六月

尾州知多郡卯之山先達大善院、講親七左衛門、半田村弥二郎兵衛、上大寺村庄右衛門、坂部村六左衛門 再建

富士山 8 合目に設置された尾張室は、1671 年（寛文 11 年）に知多郡卯之山村・半田村・上大寺村・坂部村の人々によって再建されているが、これは卯之山村の先達・大善院や講親・七左衛門を中核としており、17 世紀にはかなり広範囲にわたる講組織が形成されていたことを示しているのである。

## 2. 知多郡における富士・浅間社の勧請

『尾張徇行記』は、1800 年前後に尾張藩士・樋口好古が記した尾張国の地誌であるが、知多半島の南端に位置する「師崎村」の項の中に以下のように興味深い記載がある。

#### 【史料 6】<sup>(16)</sup>

一、富士浅間 白山権現 覚書ニ社内六畝歩給人松山ノ内除当村祢宜小大膳、九郎左衛門持○村人九郎左衛門書上ニ富士浅間社内三畝歩千賀氏控山ノ内先祖ヨリ除地ナリ、此社ハ札棟ニ天文十二癸卯年五月十一日願主千賀与八郎并地下人ト記シアリ○此浅間ノ社ノ内ニ不動、釈迦、文珠 薬師 地藏 観音 金剛界 胎藏界 阿弥陀ノ像ヲ一軀ツ、厨子ニ入安置シ、往古ヨリ此九軀仏ヲ朝暮祭レリ、サレハ浅間山一町程上ニ富士ノ八葉ヲ写シ小キ洞アリ、毎年六月朔日ニ富士参リノ者アマタアリシ故ニ、右ノ九軀仏ノ厨子ヲ洞ノ回りニ安置シテ各拝セシムル事ナリ、其時九郎左衛門先祖ヨリ村人ヲ提携案内スル故先達ト号スルナリ、其開基ノ年紀ハ不伝トナリ○白山社ハ神護寺ノ書上ニアリシ故前条ニ記ス○浅間山ノ内大日堂、稻荷社アリ此事九郎左衛門書上ニアリ

これは、師崎村の富士浅間社・白山権現社についての記述箇所であるが、引用箇所の末尾近くに「白山社ハ神護寺ノ書上ニアリシ故前条ニ記ス」とあり、ほとんどが富士浅間社の説明となっている。ここでは、富士浅間社の棟札には 1543 年（天文 12 年）5 月 11 日の紀年と願主として千賀与八郎

ならび地下人（領民）の名前が記されているとある。永原慶二氏によれば、千賀氏は志摩国鳥羽の的矢湾に面する千賀の地が旧来の本拠で、戦国期に九鬼氏の勢力に迫られるような形で知多半島に本拠を移し、近世には尾張藩の船手奉行として師崎等において1500石の知行を宛行われ、そこに屋敷をおいたとされる<sup>(17)</sup>。

また、この富士浅間社の内には、不動明王・釈迦如来・文殊菩薩・薬師如来・地藏菩薩・観音菩薩・金剛界大日如来・胎藏界大日如来・阿弥陀如来の像が1体ずつ厨子に入れて安置され祀られているとある。さらに社のある浅間山の1町（約109メートル）程上には富士山の「八葉」を模して小さい祠があり、毎年6月1日には富士参りする者が多くいるので、9体の仏像が入った厨子を祠の周囲に安置して各人に拝ませたとある。そして、先祖以来、九郎左衛門は助け合って村人を案内するゆえに先達と号しているという。とある。

「八葉」は富士山山頂の火口に沿ってある8つの峰を8つの蓮弁に譬えた言い方で、各峰に諸仏が宿っているとされた。諸仏については諸本によって異同があるが、興法寺大鏡坊が版行した『三国第一富士山禅定図』では「一ノ嶽、地藏 二、阿弥陀 三、観音 四、釈迦 内院、両界曼陀羅中央胎藏界大日 五、弥勒 六、薬師 七、文殊 八ノ嶽、宝生」とされる<sup>(18)</sup>。

このように師崎村では、実際の富士山を模して村の「浅間山」に「八葉」を再現し、富士信仰の地域における拠り所としていたのである<sup>(19)</sup>。

この施設については「其開基ノ年紀ハ不伝トナリ」とあり、いつ頃に成立したかは不明である。しかし、引用箇所冒頭に「覚

書」とあるのは寛文期（1661-73）に尾張藩により編纂された村勢調書の『寛文村々覚書』<sup>(20)</sup>のことで、この頃には九郎左衛門家が富士浅間社の運営を担っていたものと考えられる。

九郎左衛門については、1666年（寛文6年）の「知多郡師崎村惣百性宗門改并寺手形連判帳」に以下の記載がある。

#### 【史料7】<sup>(21)</sup>

高持百姓

一、九郎左衛門年五拾貳、生所師崎村、父十七年以前、母四拾壹年以前ニ相果申候、宗旨禅宗

一、女房年四拾九、当所茂兵衛娘、三拾三年以前ニ私所へ参申候、宗旨禅宗

一、子三人、女子弥々年廿九、男子六歳年拾六、男子宫松年拾壹歳、私一家居申候、宗旨禅宗

一、男子三九郎年廿貳、六年以前方江戸小舟町ニ罷有候、宗旨禅宗

右不残禅宗 旦那寺 延命寺㊤

右之通少も相違無御座候、惣而私諸親類之内、先年方吉利支丹御穿鑿ニ懸り申者、咎人も無御座候

九郎左衛門㊤

すなわち、九郎左衛門は師崎村出身の高持百姓で、禅宗の延命寺の檀家であり、妻子を持つ俗人であったことが分かる。延命寺は、山号を亀翁山と称する曹洞宗寺院で開基は千賀志摩守の重臣・稻生猪右衛門重政、開山は笑山慧闇大和尚で、開基・開山ともに1558年（永禄元年）のこととされる<sup>(22)</sup>。九郎左衛門家は、先達職を生業とはしていなかったが、代々先達職を世襲し地域の富士信仰の浸透に大きな影響を与え



たものと考えられる。

これと同じように、師崎村の地先の篠島でも島内の小高い山を「浅間山」と名付け、その山上に浅間社を祀っている事例が見られる。

# 【史料8】<sup>(23)</sup>

「自寛政元年酉四月

至同 五年丑二月

留書 篠島記録」(表紙)

一、浅間一社 但、石之小宮 篠嶋

所ハ浅間山 松寿寺控

右者誰致勧請候哉、年月等相知不申、  
先年ハ当寺末寺新造庵控ニ御座候処、  
享保十一午年右庵置寺ニ相成候後ハ拙  
寺控ニ相成、其後、社及大破、安永六  
午年石之小宮ニ再興仕、於于今、拙寺  
控ニ而御座候

右之通、相違無御座候、以上

寛政三年亥三月

松寿寺 印

この史料によれば、勧請の年月は不詳であるものの、島内の浅間山に浅間社が祀られており、松寿寺（曹洞宗）の末寺の新造庵で管理されていた。しかし、1726年（享保11年）に新造庵が廃絶したため、松寿寺の管理となり、その後、大破したため1777年（安永6年）になって浅間山に石の小宮として再興し、現在は松寿寺が管理しているとある。ここでは、地元の寺院が富士信仰の地域における拠点となる浅間社を維持していたことが分かる。

荻野裕子氏は、紀伊半島の東部から南部にかけて小高い山を「浅間山」と名付けて、山頂や山腹に「浅間神社」を祀り、祭礼が行われることを指摘している<sup>(24)</sup>。また江崎満氏は、伊勢・志摩地域において「浅間山」や「大日山」に「せんげんさん」として祀られる大日如来の石像を数多く調査して報告書にまとめている<sup>(25)</sup>。師崎村の富士浅間社や篠島の浅間社には、これらの事例と共通す

表2 『寛文村々覚書』に記載の知多郡の富士・浅間社

村名	村の社祠についての記載	社祠数	富士・浅間社の管理者	現市町村
西大高	朝苧明神・八幡二社・天神・天王・山之神・浅間・神明二社	9	村中	名古屋市緑区
阿野	富士浅間・神明・山ノ神	3	祢宜・覚兵衛	豊明市
横根	神宮・富士宮・山神・村神・山神	5	当村・普門寺	大府市
平島	熊野権現・浅間・神明・山之神四社	7	当村・彦右衛門	東海市
藪	神明・大明神・山之神・浅間	4	当村山伏・住大院	東海市
横須賀	若宮八幡・諏訪明神・浅間・社宮神・女体権現・五社明神・神明	7	当村祢宜・松大夫	東海市
平井	熊野権現・天神・富士浅間・山之神三社	6	村中	知多市
廻間	富士浅間・山之神	2	極楽寺	知多市
苅屋	富士権現・山之神	2	当村百姓・佐助	知多市
生路	大明神・西宮夷・山神・洲原権現・富士権現	5	当村祢宜・権大夫	東浦町
乙川	八幡・権現二社・浅間・山神・弁才天・天王・若宮八幡・神明・天神・毘沙門	11	当村祢宜・長大夫	半田市
北方	十二権現・白山権現・富士権現	3	当村祢宜・新右衛門	美浜町
内福寺	権現・富士浅間・山之神四社・八幡	7	永昌寺	美浜町
大井	神明・伊勢・愛宕・大日・富士・高野御前・天神・立山・五輪・白山・洲原・山神・八幡・辻神・荒神・天王・愛染・虚空蔵・風宮・弁才天・毘沙門・鎮守	22	祢宜・長大夫	南知多町
師崎	富士浅間・白山権現	2	九郎左衛門	南知多町

る要素があると言えるだろう。

『寛文村々覚書』<sup>(26)</sup>における知多郡の村々の記載のうちにも表2のごとく浅間社・富士社・富士浅間社の記載が散見される。いずれも村内に複数存在した社祠の一つとして、地域の寺院や山伏、祢宜あるいは村人によって祭祀が行われていたものである<sup>(27)</sup>。これらの祠のうち、平井村と廻間村（いずれも知多市）の富士社については、1823年（文政6年）に尾張藩に提出された書類に以下のように記載されている。

【史料9】<sup>(28)</sup>

知多郡寺本之内廻間村支配之分

黒廻間

一、富士 壺社 壺尺四面

大板葺

但シ境内御除地松林壺町式反歩

右富士社草創之儀ハ天和四甲子正月

知多郡寺本之内平井村支配之分

左りわき

一、富士 壺社 壺尺四面

大板葺

但シ境内松林六畝歩 内三畝分御除地

三畝分御年貢地

右富士社之儀、延宝八庚申四月建立仕候、

以上

廻間村の富士社は1684年（天和4年）正月に草創、平井村の富士社は1680年（延宝8年）4月に建立と記載されている。

実際には、『寛文村々覚書』にすでに両村ともに富士浅間社の記載があるので、寛文期（1661-73）には何らかの施設があったものと推察されるが、近世後期には17世紀の後半に勧請されたというように認識

されていたのであろう。両村は、中島村・平井村とともに中世には寺本庄に属していた。寺本は、先に見た富士山登山口の宿坊の道者帳にも散見される地名である。近世初頭に4つの行政村に分割されてからも寺本村として強い結び付きを有していたとされる<sup>(29)</sup>。富士山登拝を契機として、またそれに伴う富士信仰の高まりを背景として、地域に富士浅間社が勧請され、信仰の拠点となったものと考えられる。

## まとめ

知多郡からの富士山登拝は、16世紀中頃には史料上で確認することができ、この時期には修行者と見られる単独での登拝者のほか、先達を伴った組織的な登拝者を確認することができる。これは先達・講元等を伴った高度な集団化を特徴とする伊勢国の事例と同様の傾向をもつ。また16世紀中頃に創建された師崎村の富士浅間社は、祠のある浅間山山中に富士山の「八葉」を模した施設を造営した点で際立った特徴をもつが、伊勢・志摩地域において小高い山を「浅間山」と名付けて、山頂や山腹に「浅間神社」を祀る方法と共通性をもつ。

尾張・三河・美濃における富士信仰は、三禪定についての研究史の分厚さのせいもあって、すべて三禪定に包摂されているかのようなイメージが強い。しかし、三禪定の事例が1件も報告されていない伊勢国と尾張国知多郡の富士信仰のあり方には近似性が認められる。

今回確認した富士山登山口の宿坊の道者帳に散見された知多郡大谷村では、近世後期に村役人から講元に以下のような通達が出されている。

【史料 10】<sup>(30)</sup>

口上

富士参詣同行之者江申聞之事  
 道中同行中能宿々宿屋ニ而万事慎可申事  
 川越シ船越シ互ニ心を付、喧嘩口論堅相成  
 不申事、年上之者申事必背事無之事  
 暑中強候得者、随分朝早く宿立出、昼中之  
 間休ミ弱キ者いたわり可申事  
 先年之通儉約致、路銀も壹両壹分位ニ而、  
 名古屋迄帰国ニ相成候様致度候、御時節柄  
 御上様江恐入候儀ニ候得ハ嚴重ニ始末可致  
 事  
 前頭之儀、年上之者可成丈、心を付取計ら  
 ひ可申談事  
 右之通、講元ハ嚴重ニ申付可被成候、以上  
 六月十八日

村役人㊤

講元甚左衛門殿

ここでは、道中の宿や川越の際の心得、道中で喧嘩口論をしないことが定められ、年上の人言うことを聞くように定められている。また道中の節約と路銀を1両1分くらいで名古屋まで帰国するようにとされている。この文書は、村役人の名で出されており、村でこの講中が大きな位置を占めていたことを示している。また文面からは、この講が若者による富士山登拝をその目的としていたことがうかがえる<sup>(31)</sup>。

近世に三禅定の習俗が最も濃厚に見られるとされる尾張国知多郡においても、富士信仰は他地域と相互に影響しあって、地域の需要に応じるかたちで受容されていたものと考えられる。

## 注一覧

- (1) 他地域から出立した事例として、1760年(宝暦10年)に京都在住の文人画家の池大雅(1723-76)が三山に登攀し、『三岳記行』(京都国立博物館所蔵)という記録を残したことがよく知られている。ただし、これについては住谷雄幸「江戸の山岳紀行—三山(富士山・白山・立山)紀行を中心に—」『山梨英和短期大学紀要』第30号(同短期大学、1996年)にあるように、谷文晁『日本名山圖會』へとつらなる文人・墨客の間に起こった「高山に登り、その靈氣にふれ、雄大な眺望を楽しむ風潮」の一端として捉えることが的確であろう。
- (2) これまでに、三禅定については多くの論考が発表されている。これらを列記すると以下のとおりである。小林一麿「三山禅定について」『まつり』31号(まつり同好会、1978年)、高瀬重雄「富士山・白山・立山の三山禅定」『高瀬重雄文化史論集1 立山信仰の歴史と文化』(名著出版、1981年)、津田豊彦「知多地方の立山信仰」『半田市立博物館研究紀要』20(同館、1999年)、福江充「富士山・立山・白山の三山禅定と芦峯寺宿坊家の檀那場形成過程」『研究紀要』vol.10(富山県[立山博物館]、2003年)、村中治彦「郷土散策 白山信仰」『郷土誌かすがい』48、49、56、60~72(春日井市、2002~2013年)、福江充「加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と廻檀配札活動」『近世の宗教と社会』I(吉川弘文館、2008年)、富山県[立山博物館]平成二十二年度特別企画展図録『立山・富士山・白山 みつの山めぐり—一霊山巡礼の旅「三禅定」—』(同館、2010年)、



- 福江充「芦峯寺宿坊家の尾張国檀那場と三禪定（富士山・立山・白山）関係史料」『研究紀要』vol.17（富山県〔立山博物館〕、2010年）、加藤基樹「『三禪定』考一成立と『三の山巡』にみる実態一」『研究紀要』vol.17（富山県〔立山博物館〕、2010年）、加藤基樹「『三禪定』の史料的研究－白山・立山・富士山の三山巡礼の成立と展開」『宗教民俗研究』20（日本宗教民俗学研究会、2010年）、福江充「富士山・立山・白山を巡る三禪定の時期的変遷－特に白山山麓の馬場の問題にも関連して」『北陸宗教文化』23（北陸宗教文化学会、2010年）、石造物資料にみる江戸時代の三禪定（富士山・立山・白山）」『山岳修験』48（日本山岳修験学会、2011年）、加藤基樹「中世『三禪定』覚書－三禪定研究のゆくえ－」『研究紀要』vol.18（富山県〔立山博物館〕、2011年）、加藤基樹「『三禪定』の思想研究に向けて－尾張知多『西方四十八願所縁起』をめぐって－」『研究紀要』vol.21（富山県〔立山博物館〕、2014年）。
- (3) 菊池邦彦「史料紹介 三山禪定と富士山信仰」『甲斐』第121号（山梨郷土研究会、2010年）。
- (4) 拙稿「近世の尾張国知多郡における富士信仰－小鈴谷村を中心に－」『知多半島の歴史と現在』18号（日本福祉大学知多半島総合研究所、2014年）。
- (5) 菊池邦彦「中世後期から近世前期における富士山村山口の登山者－『富士山檀記』を中心に」『富士山御師の歴史的研究』（山川出版社、2009年）。なお、「富士山檀記」については『社寺史料研究』7号（社寺史料研究会、2005年）に伊藤昌光氏による翻刻、西海賢二氏による史料紹介が掲載されている。
- (6) 「三州檀所帳」に記載の地名のうち「ふつと」は布土であると判断して、筆者が追加した。
- (7) 堀内真氏は「富士に集う心－表口と北口の富士信仰」『中世の風景を読む 第三巻 境界と鄙に生きる人々』（新人物往来社、1995年）において、富士山本宮浅間神社の各宿坊の変遷を明らかにするとともに駿河から伊勢に至る道者場（檀那場）の分布を概観し、「尾州（尾張）では春日井郡と知多半島に分布が認められる」と指摘している。
- (8) 浅間神社社務所編『浅間文書纂』（浅間神社社務所、1931年・名著刊行会、1973年再版）所収、公文富士氏記録3「御炊坊道者帳写」。
- (9) 注8前掲書所収、案主富士氏記録5「大宮導者坊記聞」。
- (10) 注8前掲書所収、公文富士氏記録6「御炊坊道者帳」。
- (11) 注8前掲書所収、公文富士氏記録5「道者帳」。なお、宿坊の特定は注7前掲論文の考察による。
- (12) 先達・又次郎については同行人数の記載がないが、奉納金の金額の多さから先達・万大夫と同程度の人数を伴っての登拝であったと考えられる。
- (13) 注7前掲論文。
- (14) 青柳周一「須走御師宿帳の研究－御師の宿泊業経営の実態とその文書機能についての考察－」『小山町の歴史』第9号（小山町役場、1996年）。
- (15) 富士宮市教育委員会『村山浅間神社調査報告書』（2005年）所収、旧大鏡坊富士氏文書K64。
- (16) 名古屋市蓬左文庫編『尾張徇行記』

- 第六卷（愛知県郷土資料刊行会、1976年復刻刊行）。
- (17) 永原慶二「伊勢・紀伊の海賊商人と戦国大名」『知多半島の歴史と現在』No. 4（日本福祉大学知多半島総合研究所、1992年）。
- (18) 竹谷勲負『富士山の祭神論』（岩田書院、2006年）。
- (19) 西村傳之助『南知多師崎誌』（誠文社、1934年）には、「其外各山之絶頂には各神社を祭りしが維新の際合祀し現存する者に字栄浅間山に富士浅間社あり天文十二年の創建にして百姓先達九郎左衛門の控なりと、本尊に木花開耶姫命並本地弥陀之尊木像立像仏工定帳之作。附、本堂に天文十二年癸卯五月願主千賀與八郎薬師像座下之書付再下附とあり」とある。
- (20) 名古屋市教育委員会編『寛文村々覚書（下）・地方古義』（愛知県郷土資料刊行会、1983年復刊）所収。
- (21) 『南知多町誌』資料編4（南知多町、1995年）所収。
- (22) 『南知多町誌』本文編（南知多町、1991年）。
- (23) 徳川林政史研究所所蔵「篠嶋文書」。
- (24) 荻野裕子「南島町方座浦の浅間山ー紀伊半島の小型富士調査に向けてー」『富士山文化研究』第6号（富士山文化研究会、2005年）。
- (25) 江崎満『伊勢・志摩の富士信仰を訪ねてー大日如来探訪写真集ー』（鳥羽郷土史会、2014年）。
- (26) 注20前掲書所収。
- (27) 『寛文村々覚書』に記載された知多郡内の祠全体を集計すると在来の信仰に基づく「山之神」が178社と最も多く、「八幡」50社、「神明」48社、「天神」31社、

- 「白山」27社、「大明神」21社、「（牛頭）天王」20社、「富士・浅間」15社、「愛宕」8社、「荒神」8社と続く。知多郡全体を見た場合、浅間社など富士信仰に基づく社祠が中核を占めているわけではない。地域における「富士信仰」を他の信仰との関係で位置付けることは今後の課題である。
- (28) 徳川林政史研究所所蔵「知多郡寺本町数之覚」（文政6年正月）より抜粋。
- (29) 『知多市誌』本文編（知多市、1981年）。
- (30) 常滑市とこなめ陶の森資料館所蔵谷川家文書。同文書によれば、講元の甚左衛門は、修験道当山派の梅本院（飯道寺）より1810年（文化7年）に先立号の免許を受けている。
- (31) 知多郡に隣接する三河国碧海郡刈谷町でも、1800年（寛政12年）6月14日から20日間の予定で町人2名が富士山へ赴いた記録が残る。『刈谷町庄屋留帳』第7巻（愛知県刈谷市、1981年）所収。

## 【付記】

本研究は JSPS 科研費 26370804 の助成を受けたものです。